余暇のひととき

文化協会より

俳句

〈かわせみ句会〉

湯けむりの母の故郷春浅き　岡本　昌美
春愁や母の遺せし髪飾り　黒田　和恵
一椀に三葉の緑ひろがりて　河野　宜子
春の雨ルノワールの絵のコーヒー店　中村　里子
昨日遠し真白き蝶に出合ひけり　浜野　茂
囀りやわづかに木の葉揺れてをり　前川　堤
予土線や春田に山羊の遊びゐる　薬師神　和美
窓近く畑打ち鍬上がりけり　平岡　千代子

〈早蕨句会〉

濁世とて煌めく山河初日の出　松浦　泉湧
絵本より跳び出す白馬冬うらら　井芝　千章
翔一文字墨たっぷりと筆始め　榎本　カメノ
初凪や快速船が水尾曳きて　岡根　富佐子
笹子鳴き二人にもどる暮しかな　岡野　未由子
庭の椿咲くを待たずに逝かれけり　奥山　八重子
初心大事雪のやまなみ真向かひに　酒井　孝子
岩噛んで越えゆく寒の涛頭　浜田　千鶴
厳かに灯ともる雪の奥の院　毛利　珪子
色づきの遅き金柑薄日射す　山田　勢津子
片手で結ぶ末吉の初御籤　山本　ことみ

〈檜扇句会〉

梵鐘の余韻揔の芽山椒の芽　松浦　泉湧
詩のかけら拾はむ土筆蕗の薹　板﨑　喜久子
沓形の織部の薄茶不器男の忌　岩藤　富子
推敲に倦みし頬杖日脚伸ぶ　岡田　咲光
未知の世へ蕾ほぐせり初桜　奥野　美代子
心の中覗かれさうな春の月　織田　好江
小糠雨芽吹き柳の耀へり　近藤　正子
芽吹き競ふ無爲に馬齢を重ね来て　﨑山　治
野仏に水音軽し日脚伸ぶ　日高　峰子
縋る杖吾にも欲しき豆の花　森川　瞳
薄日差し荅膨む枝垂梅　山本　浩康
若葉より鳥語零るる過疎の里　山本　道美

短歌

〈つしま短歌会〉

庭先につわぶきの花咲き揃ひ愛でるし君のおもかげの顕つ　中村　美鈴
風立ちて吹かるるままに虎杖の花こぼれ散る野の道をゆく　三浦　稔子
早春の岩松川に網を張りしら魚漁の人影動く　西﨑　美紀子
八十路迎ふ我身ひきしめおだやかに凪ぎし海面のさざ波を追ふ　常盤　市子
膝の痛み今日は良好わが長き影踏み帰る茜さす道　清家　幸子